

波多野精一の時代認識

村松 晋

「1 問題の所在」

波多野精一（明治十年～昭和二十五年）は、『宗教哲学』（昭和十年）、『時と永遠』（昭和十八年）といった作品の著者として、斯界では著名な学者である。筆者はこの波多野について、従来蓄積されてきた論考とは異なった視角からする考察を、既に試みたことがある。^①

具体的には、これまでとかく、神学的あるいは宗教哲学的な観点から論じられることの多かった波多野精一その人を、何よりもまず、「時代」を生きた一人の思想家として、よりトータルな視点から捉え直す契機を得たいとの視点から、これまでの波多野研究で等閑視されてきた、彼の社会認識・時代認識に肉迫すべく、全集第六巻に集録された、主として敗戦前後の書簡に着目し、論究を行った。

むしろ、前稿にて、論点のすべてを論究できたわけではなく、脱稿後に見えてきた問題も少なくない。そこで本稿では、かつて論じ切れな

かった若干の論点に考察を加えることにより、前稿同様、従来の「波多野論」への新たな問題提起を試みることにする。

いまだ「資料紹介」の域を出ない小論ではあるものの、ここでは「神学者」ないし「宗教哲学者」としてではない、波多野の別個な相貌を描き出すことにより、今後、近現代日本における、キリスト者のありようを論じていくための、ささやかな場の提示を企図している。

「2 歴史・伝統への言及とその特質」

前稿でも言及したように、昭和二十年八月十五日正午、昭和天皇による「玉音放送」を耳にした波多野は、爾来、間もなく知人に宛てて、胸臆を吐露する手紙をしたためていた。その書簡は既に紹介したが、ここでは波多野が戦後日本の進路を問うなかで、ほかならぬ「祖国の歴史」を重んじていた事実を、指摘することから始めたい。該当部分を再録する。

これからどんな困難がわれわれの行くへを遮り現はれるでせうか。しかしどんな困難でもそれを克服し得べき途は開かれ、復興と発展との望みはわれわれの進路を照してをります。御持論通り、国体と歴史とに基るを据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設は、われわれのたふとき、よろこびに充ちたる、新しき任務でなければなりません⁽²⁾。

注目すべきは、「玉音」放送終了後、波多野が戦後日本の使命に関し、開口一番、述べていることがらが、「キリスト教」でも「神」でもなく、「国体と歴史とに基るを据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設」であつた点である。

ここには波多野における、祖国日本の歴史への、強い自負心が見られるが、注目すべきは、それが本書簡に限られるものではない点である。たとえば次のような手紙がある。

(波多野の早稲田時代における教え子で、『本居宣長』等の著書がある日本思想史学者・村岡典嗣を悼みつつ) 同君は時勢にこびるといふことを知りませんゆゑ、わが国の変りはてた姿にも別に動ずることなく、民主々義やアメリカの機嫌をとる心持もなく、相変わらずの、おちついた、たゞ真理に忠実な学問的良心と情熱とによつて動かされて、掉尾の大著述を完成し得たにちがひありません。…小生は、かういふ時勢にこそ、日本の過去の真の姿を知るために、一層力を入れて宣長の著書などを読むべきだとさへ思ふ⁽³⁾。

目下の世相には、なんと嘆くべき悲しむべきものが多いことであらう。食糧問題等々を申すではありません。わが国の歴史を顧みず、わが国民の文化をも棄てて、たゞ新しきものを追ひ、ほんとうにわかつてもゐない民主主義云々の御題目を口先で唱へてゐるものが多いのは、何といふ痛嘆事であらう。公平無私であるべきラジオでさへ、わが国の過去の歴史との聯繫を主張する政党などを一概に反動的呼ばりしてゐるのですから⁽⁴⁾。

ここに明らかなように、波多野は敗戦後の日本における風潮に異を唱え、「かういふ時勢にこそ、日本の過去の真の姿」や「わが国の歴史を顧み」るべきだと、自国の歴史や伝統を軽視する傾向を戒めた。思うに新日本の理想として、「国体と歴史とに基るを据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設」を説く波多野にとって、戦後日本の様相が、己の足下を見失い、「たゞ新しきものを追」うものと映じたのは、無理からぬことだつた。

しかしここで注意したいのは、波多野が自国の「伝統」を重視していた事実以上に、その時事的な言説に、キリスト者としての刻印が乏しく見えることにほかならない。この点、たとえば同じ頃、南原繁や矢内原忠雄は、フィヒテの講演『ドイツ国民に告ぐ』を意識しつつ、民族の理想を鼓舞すべく、建国神話や本居宣長に説き及び、託された意味世界を評価する一方で、あくまでキリスト者としての視点を失わず、その神観念と厳格に対峙することにより、戦後日本の進路を問いかけようとする、強靱な構えを見せていた⁽⁵⁾。

こうした姿勢に比べると、歴史や伝統をめぐる波多野の主張は、一般的・抽象的な物言いに留まっており、「国体と歴史とに基を据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設」を主張するみずからは、神にとらわれた者として、日本の歴史のいかなる部位を、いかなる目線で見ようとするものなのか、右の文中、「一層力を入れて宣長の著書などを読むべきだとさへ思ふ」と述べる以外、具体的なことには言及していない点が注目される。

書簡であることをふまえれば、右記のような論評は、「ないものねだり」にも思われよう。しかしながら、波多野の時事的な言説に、キリスト者としての内面的な必然性が、いささか希薄な傾向は、歴史や伝統をめぐる言説にとどまらない。さらに次節で検討する。

「3 占領軍に向ける視座」

波多野の現実認識をうかがううえで、示唆に富む資料としては、彼が占領軍たる米軍に言及したいくつかの書簡があげられる。一例をあげる。

進駐軍の態度は頗る堂々たる立派なものであり、それに兵士たちはいかにも無邪気なほがらかなあかるい生活をしてゐるさうで、心ある者は尊敬の念を禁じ得ないやうです。：マッカーサー総司令部の命令や言論にはアメリカ式のドグマチズムの片影はたしかにさしてゐませうが、わが政府や当局がなすべくしてなすべき勇

気と誠意と力とを欠いてゐるやうな点を、あたかも医師がメスをもつて膿でも出してくれるやうに一々突いてくれるのは、ありがたい事です。私は、アメリカ軍をわが国の救済者として感ぜずにはいられません。⁶⁾

波多野はアカデミシャンとしての立場から、もともと米国には高い評価をしておらず、ある書簡のなかでは「米国はPhilologieの見地よりはNeroに候⁷⁾」とまで断言して憚らなかつた。しかし右に見られるように、敗戦後二カ月を経ての手紙では、「アメリカ軍」を「わが国の救済者として感ぜずにはいられません」とまで述べている。

時おりしも昭和二十年十月は、GHQにより、治安維持法の撤廃や政治犯の釈放等、数々の指令が出された月でもあつた。波多野は、丸山眞男の言葉を借りるなら、「昭和になって急に横合から軍部という乱暴者が出てき」たせいで、「あんなに素晴らしかつた日本⁸⁾」、具体的には「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された」日本が、「めちやめちやに」¹⁰⁾「されたと考えていただけに、一連の改革を、「軍部という乱暴者」を一掃し、もつて「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された明治時代の理想」を復活せしめるものとして、熱く歓迎したのであつた。次のような書簡もある。

軍司令部の指令は実にうれしく又感謝に堪へない事柄です。実にわれ／＼は米国によつて救はれたのだと申しても過言でありません。：進歩と改善、否精神的革命の警鐘が打たれ、目標は道に行くへに高くあざやかに掲げられ、実現の第一歩は確実に踏み出

され、生れかはずた新しき世の希望の曙光が輝きそめたのですから、私のやうな老人もこの新しき生きがひのある御世にあふを得た幸福を感謝しつゝ、生をおはることが出来ませう。¹¹⁾

昭和二十年十二月といえ、いわゆる農地解放指令や神道指令の出した月である。この手紙の執筆時期は、師走も押し詰まった頃だけに、波多野は、激動の「昭和二十年」を振り返り、敗戦以来のGHQの施策を顧みて「救済者」としての思いを強くしたのに相違ない。

ただし、既述のように、ここでも真に見るべきは、波多野が占領軍たる米軍を、礼賛していた事実それ自体ではない。注目したいのはこの一点、すなわち波多野の感慨は、いうまでもなく当時の共産党における、「占領軍＝解放軍」規定を想起させるものであり、それだけに当時の一般的な感覚に連なるものとして、キリスト者としての刻印は、歴史をめぐる言説同様、やはり希薄だということである。

この点、先述した矢内原・南原たちは、敗戦を神の裁きと受け止める点では、波多野と共通していたものの、しかし彼らはみずからの信仰に基づいて、祖国日本の現状を、ユダの「バビロン捕囚」に重ね合わせて理解していただに、占領軍たるアメリカに対しても、等しく、神の前なる存在として、批判・相対化する目線を失うことがなかった。¹²⁾両者においては、日本・アメリカいずれの国も、あくまでも「地の国」であり、それらを手放しで礼賛することは、断じてありえなかった。この点、彼らは超越的普遍者に連なる者として、同時代の言説とは、一線を画することを得ていたのである。

このような事実をふまえ、あらためて、波多野の書簡を見つめると、彼はアカデミシャンとして、稀有な目線と力量をたずさえてはいたものの、眼前の時事的な問題を、信仰的批判原理に恃むことにより、問い直そうとする契機には、いささか乏しかったといわざるを得ない。かかる波多野の相貌は、これまで映し出されることがなかったが、それだけに、波多野精一その人を、今後、「時代」を生きた一人の思想家として、よりトータルな視点から捉え直していくためには、対峙することを避けられない一面になると思われるのである。

「4 おわりに―晩年の波多野における可能性―」

本稿では、前稿での試みと同様に、波多野の時代認識・社会認識に焦点をあてて論じたが、ここで結論としていいうことは、波多野はキリスト者として、現実を超越した地点に立脚する者でありながら、現にある通俗的な見解を、まさに自己の立脚する超越的・普遍的な立場から、批判・相対化する姿勢において、弱かったのではないかという点にはほかならない。

こうした波多野のまなざしを、いかに捉えていくべきか、このことは前稿でも指摘したとおり、戦時下における波多野のあり方を考慮にいった、主要著作の再読ともども、今後の研究に課せられた問題と称しうる。しかし、この点を論ずることは別の機会に譲り、ここでは波多野の、いわば「可能性」をうかがわせる書簡を紹介し、「波多野論」

とはいささか毛色の変った本稿の締めくくりとしたい。それは敗戦から一年あまり、疎開先から近況をしたためた、次の手紙のことである。

私の方は別にこれといつて申し上げるやうな波瀾もなき、いともながらの平安な、しかし平凡ないかにも老人らしき隠遁の生活を、この静かな同じく平安平凡な田舎町につけてをります。たゞ時折幾分のさゞなみをこの安らかな平面に呼び起すのは、当地方の二三の人々の来訪であります。それは、農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家といふやうな人々で、その画家が今年特選に這入つたといふのを除いては一人も世に名を知られてゐる人もなく又学者もありません。画家と申す人も、当地の最も由緒ある旧家のなれの果てで、今は殆ど純然たる農夫です。話題も世間話し、身の上話し、体験談、素人人生観のたぐひで、やゝ念入りなので、私の「時と永遠」を数回もわからぬながらに熟読した校長さんの幼稚な、しかし、素直な、無邪気な、真心のあふれた質問と感想、一農家の主人の、二十年に互つて、殆ど何等の進歩も見せずに、ギリシア語の聖書にかじりついてゐた人の幼稚な、しかし時としては専門家をも瞠若せしめるやうな適切な鋭い質問ぐらゐるなものです。私は七十歳の今日、はじめて一つの別天地に接して、今までに味はないやうなよろこびを覚えてをります。多くの新しい人生の真理を知り味ひを味ひました。この体験は私の老年にあかるさとあたゝかみとを加へてくれました

た。この二年近くの田舎住ひは私にとつて実にたふとき体験を与へてくれました。感謝あるのみです¹³⁾

やや長くなつたが、ここで注目したいのは、波多野が疎開先で出会つた人々、すなわち「農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家といふやうな人々」との交流を顧みて、それを「今までに味はないやうなよろこびを覚え」「多くの新しい人生の真理を知り味ひを味」つたと語っている点である。

時おりしも敗戦後間もない時期である。周知のとおり論壇は、近代主義的な潮流に覆われて、農村ならびにそこで生活する人々のありようは、「封建遺制の残存」などと、糾される傾向が強かつた。現実的にも、都市部の食糧不足をあてこんだ闇取引等々、農村に疎開していればこそ、「純然たる農夫」をめぐる、芳しくない噂話も、少なからずその耳に入ったことだろう。

しかし波多野は疎開先にて、おそらくはそうした見聞を経ながらも、書簡を見る限り、農村の人々のエゴイズムや、あるいは「社会的関心の欠如」を指弾するようなことはしなかつた。逆に波多野は右の文中「素直な、無邪気な、真心のあふれた質問と感想」と、たたみかける形容詞が示唆するように、疎開先でふれあつた「純然たる農夫」たちの誠実さ、その真摯さにこそ、心打たれていたのであつた。

波多野のそうした感性こそ、「オールドリベラリスト」の「限界」だと問題視する向きもあるかもしれない。しかし、「田舎町」で暮らす「純然たる農夫」のことは、「あかるさとあたゝかみ」を見出して、

「今までに味はないやうなよろこびを覚え」と言い得たその精神に、筆者などは、波多野の新たな可能性を見出さずにいられない。

顧みて、波多野は厳格な学究として、大学人としての生涯を貫いてきただけに、交流圏は決して広くはなく、その殆どは、同様のアカデミシャンで占められていたと思われる。事実、波多野は「平安平凡な田舎町」での生活を「別天地」と表現し、そこでの日々を「今までに味はない」と表しているが、このことを換言すれば、波多野自身、「七十歳の今日」に至るまで、「農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家というやうな人々」と、親しく「世間話し、身の上話し、体験談、素人人生観のたぐひ」を取り交わす機会がなかったということにはほかならない。

しかし波多野は、疎開先での生活を、窮屈な、度し難いものとして否定することはしなかった。逆に「この二年近くの田舎住ひは私にとつて実にたふとき体験を与へてくれました。感謝あるのみです」と述べる事実は、波多野が「農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家というやうな人々」との交流を、「今まで」の自己の世界を開放し、その視座や価値観を拡大ないし鍛造する一契機となしえたことを、如実に証拠だてるものである。

もちろん同時期の波多野の手紙を仔細に見ると、右の書簡に反するごとき文言が、皆無というわけではない。たとえば次のような言葉も見出せる。

我が国の政治も、よほど注意してか、りませんと、民主々義の

声に圧倒されて、所謂中流の知識階級の没落、所謂大衆乃至プロレタリアの専制を促進することになります。私にはよくわかりませんが、今日の形勢では、或は労働者の月収が頭脳勤労者のそれを凌駕し、後者は最もきびしい生活難に陥り、子弟の教育、従つて、次の世代の知識階級の育成を至難の業とすることになりはしますまいか。素人眼には憂慮すべき事柄のやうに映じます¹⁴

「所謂大衆」を疑問視する波多野のこうした文章は、読みよつては、時勢の変化を認めずに、ただひたすら、その境遇の動揺を、危惧したのもとも受け取れる。しかし、疎開生活を回顧する、波多野の先の目線には、未知の世界に向けられた、開放的な志向性がはらまれているだけに、波多野は「中流の知識階級」にして「頭脳労働者」たる己の立場、さらに「今まで」「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許され」続けてきた自身の状況を、時代のなかで反芻し、新たな地平に到達しうる可能性を秘めていたように思われるのである。

歴史に仮定が禁物なことは否めない。しかし「田舎町」で暮らす「純然たる農夫」のことばに「あかるさとあた、かみ」を見出して、そこに「今までに味はないやうなよろこびを覚え」ていた波多野が、戦後、もうしばらく存命であったとしたら、おそらく彼は、新時代にふさわしい「あかるさとあた、かみ」をたずさえた言説を、「農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家というやうな人々」とどくかたちで、必ずや紡ぎ出していたに相違ない。全集巻頭に収録

された波多野の相貌、ことに疎開先での、いかにも好々爺然とした一枚（全集第六巻卷等参照）が、筆者にその確かさを確信させるのである。

〔注〕

- (1) 拙稿「波多野精一と敗戦」（『聖学院大学論叢』第十九巻第一号、二〇〇六年 所収）
- (2) 香川鉄蔵宛 昭和二十年八月十五日 『波多野精一全集』第六巻、岩波書店、一九六九（以下、本巻からの引用は、『波多野』と略記）、三五七頁
- (3) 佐藤洽六宛 昭和二十一年四月二十二日（『波多野』四二二頁）
- (4) 佐藤洽六宛 昭和二十一年四月二十二日（『波多野』四二二頁）
- (5) 敗戦直後の南原および矢内原といった人々における、伝統への言及を考察した論考としては、大濱徹也「矢内原忠雄にみる日本精神」（『無教会研究 聖書と現代』第七号、二〇〇四年）が示唆に富む。
- (6) 山谷省吾宛 昭和二十年十月十八日（『波多野』一二四～一二五頁）
- (7) 村岡典嗣宛 大正十年六月五日（『波多野』七五頁）
- (8) 丸山眞男「座談会 日本の運命―興廢の岐路」（『世界』昭和二十五年三月号）『丸山眞男座談』第二巻、岩波書店、一九九八、二三八頁）
- (9) 石原謙宛 昭和二十年八月二十三日（『波多野』二四九頁）。
- (10) 前掲(8)と同じ
- (11) 山谷省吾宛 昭和二十年十二月二十二日（『波多野』一二六～一二七頁）
- (12) 内村鑑三に連なる人々の敗戦認識、特に矢内原忠雄のそれに関し
ては、将棋面貴巳「矢内原忠雄と『平和国家』の思想」（『思想』第九三八号、岩波書店、二〇〇二年第六号）が示唆に富む。拙著『三谷隆正の研究―信仰・国家・歴史―』（刀水書房、二〇〇一年）も参照のこと
- (13) 安部能成宛 昭和二十一年十一月九日（『波多野』四五五頁）
- (14) 香川鉄蔵宛 昭和二十一年三月十日（『波多野』三六八頁）

Recognition of the Times in Seiichi Hatano

Susumu MURAMATSU

This study assumes that to elucidate recognition of the times is one of the purposes in Seiichi Hatano. This paper primarily investigates recognition of tradition and secondarily deals with recognition of the occupation a situation. As seen through his life, the characteristics of a Christian are slightly weak in the recognition of the times in Hatano. However, if he had continued writing as he did after evacuating to Tohoku during the war, he might have become more widely accepted.

Key words: Christianity, Tradition, the Pacific War, Intellectual, Seiichi Hatano, Tadao Yanaihara